蘇軾詩注解（二十一）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原田直枝
西岡淳
（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

陳伯修察院が闕に赴くを送る（一八五五）

張嘉父長官を送る（一八五六）

軾　潁州に在りしとき、趙徳麟と同に西湖を治す。未だ成らずして揚州に改めらる。三月十六日、湖成る。徳麟　詩有りて懐わる。其の韻に次す（一八五七）

徳麟が西湖新たに成りて懐わるる絶句に次韻す（一八五八）
再び徳麟が「新たに西湖を開く」に次韻す（一八五九）
官に到りて倦を病み、未だ嘗て客を会せず。毛正仲　茶を恵む。乃ち端午を以て石塔に小集し、戯れに一詩を作って謝を為す（一八六〇）
晁无咎学士が相迎うるに次韻す（一八八二）

一八五五（施三一―五）

送陳伯修察院赴闕
陳伯修察院が闕に赴くを送る

1 裕陵固天縱　裕陵は固に天縦
2 筆有雲漢姿　筆に雲漢の姿有り
3 嘗重連山象　嘗て連山の象を重ね
4 不數秋風辭　「秋風の辞」を数えず
5 龍騰與虎變　龍騰と虎変と
6 貔豹復何施　貔豹　復た何ぞ施さん
7 我窮眞有數　我が窮　真に数有り
8 文字乃見知　文字　乃ち知らる
9 聞君射策日　聞く　君　射策の日
10 妙語發疇咨　妙語　疇咨を発す

11 一日喧萬口
12 驚倒同舍兒
13 豈知二十年
14 道路猶遲遲
15 苦言如藥石
16 瞑眩終見思
17 屈伸反覆手
18 獨於君可疑
19 四門方穆穆
20 行矣及此時

一日　万口に喧しく
同舎の児を驚倒せしむ
豈に知らんや　二十年
道路　猶お遅遅たるを
苦言は薬石の如し
瞑眩して終に思わる
屈伸は反覆の手
独り君に於て疑う可けんや
四門　方に穆穆たり
行け　此の時に及べ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。知揚州として揚州にあった。

○陳伯修　陳師錫のこと。伯修はその字。建州建陽（福建省）の人。熙寧年間に進士に登第し、知臨安県から監察御史に転じた。元祐の初めに蘇軾に推挙されて秘書省校書郎となり、後に殿中侍御史、知潁州などを経たが、いわゆる元祐党人とされて官を削られ、六十九歳で卒した。『宋史』巻三四六に伝がある。○察院　監察御史の別称。もとは唐の監察御史の官署のこと（『新唐書』百官志三）。○赴闕　陳師錫が都に赴いたことについては、『続資治通鑑長編』元祐七年六月戊寅の条に、「左奉議郎陳師錫をば校書郎と為す」との記述がみえる。

1○裕陵　宋・神宗の陵墓の名で、神宗をさす。『宋史』神宗紀三に「（元豊八年）十月乙酉、永裕陵に葬らる」（宋朝の帝陵の名はいずれも「永」の字を冠する）とある。○天縦　天が許して、ほしいままにさせること。『論語』子罕篇に「固に天　之を縦いままにし将ど聖にして、又た多能なり」とあり、朱子の集注に「縦は猶お肆のごとし、限

量を為さざるを言うなり」という。2〇筆有一句　雲漢は、天の川のこと。『詩経』大雅「棫樸」に、「倬たる彼の雲漢、章を天に為す」とあり、毛伝に「倬は、大なり。雲漢は、天河なり」、鄭箋に「雲漢の天に在るや、其れ文章を為す、譬えば猶お天子の法度を天下に為すがごとし」とある。3〇嘗重一句　連山は、夏の時代の易の名。『周礼』春官宗伯「大卜」に、「三易の法を掌る。一を連山と曰い、二を帰蔵と曰い、三を周易と曰う」とある。『周易正義』巻一「三代の易名を論ず」に引く鄭玄『易賛』及び『易論』に、「夏は連山と曰い、商は帰蔵と曰い、周は周易と曰う」とある。象は、易の爻または卦の解釈。一句は、神宗が連山易の爻・卦を重ねた、すなわち易筮をよく行なったことをいう。4〇秋風辞「秋風起こって白雲飛び、草木黄落して　雁　南に帰る」に始まる、漢・武帝の「秋風の辞」（『文選』巻四五）のこと。馮応榴は、「三・四の両句は、神宗の経義を以て士を取り、詩賦を罷むるを言うなり」という。5〇龍騰一句　龍騰は、龍がおどりあがること。文章や筆勢に勢いのあるさま。盧照鄰「五悲」の「才難を悲しむ」文（『幽憂子集』巻四）に、「高談すれば則ち龍騰豹変し、筆を下せば則ち煙飛霧凝す」とある。虎変は、虎が毛を抜けかわらせて美しくなるように鮮やかであること。『周易』革卦（九五）の象伝に「大人虎変す、其の文炳たるなり」とある。一句は神宗の学問および人格を高く評価する。6〇貔豹一句　貔は、ネコ。揚雄『法言』吾子篇に「聖人は虎別す（別は変に同じ）、其の文炳たるなり。君子は豹別す、其の文蔚たるなり。弁人は貔別す、其の文萃たるなり」とあり、虎の下位に豹と貔が置かれる。一韓智翃は、「サテ、神宗ノ其ノ文章ハ、龍ノ如（ク）ニ騰リ、虎ノ如（ク）ニ変ジテ、文章ニヲイテ自由三昧ニシテ、変化無窮ニシテ妙ナル程ニ、其ノ御前デハ、比興ナ人ノ才ノ貔豹ノ如キ者ハ、其ノ才藝ヲ施スコトヲ得ザルゾ」（『四河入海』巻二二の二）と記す。7 8〇我窮・文字二句　元豊二年（一〇七九）、蘇軾は朝政誹謗の罪に問われて御史台の獄に下り、黄州に流謫されるが、神宗が崩じて後に名誉を回復され、知登州を経て朝に召された。元祐三年（一〇八八）、翰林学士の任に在った蘇軾は宣仁太后と相対し、先帝神宗が蘇軾の文章を読むごとに、「奇才なり、奇才なり」と感嘆しながらも、登用には及ばなかったことを知る（『宋史』蘇軾伝）。二句は、窮地に立つ運命にあった蘇軾だが、その際にも彼の文章は天子に知られていたことをいう。9 10〇聞君・妙語二句　射策は、漢代の官吏登用試験の一つで、問題を書いた竹の札（策）を伏せおき、受験者に選ばせて解答させ

たもの。「御容を写せる妙善師に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊三八六頁）を参照。ここでは陳師錫が殿試を受験したことをさす。『宋史』陳師錫伝に「熙寧中、太学に游び、俊声有り。神宗其の材を知る。廷試に及び、名を奏して甲乙の間に在り。帝偶たま其の文を閲し、屢しば読んで屢しば嘆賞し、侍臣を顧みて曰く、「此れ必ず陳師錫なり」と。封を啓けば果たして然り、擢んでて第三と為す」とある。妙語は、詩文のすぐれたことば。『蘇軾詩注解（五）』に収める作品番号一六四九の詩の注を参照。疇咨は、たずね求めること。もとは堯が人物を登用せんとして発したことば。『尚書』堯典に、「疇か咨、時を若えん、登庸せん」（登庸は登用に同じ）とある。12〇同舎児　陳師錫と同時に登第した若者たちのこと。15〇苦言　聞きづらいが役に立つ諫めのことば。忠言。『史記』商君伝に、「貌言は華なり、至言は実なり、苦言は薬なり、甘言は疾なり」とある。〇薬石　薬と石ばり。病の治療に用いることから、人の身のためになる言葉や教訓をも意味する。『春秋左氏伝』襄公二十三年に「季孫の我を愛せるは、疾疢なり。孟孫の我を悪みしは、薬石なり」とある。16〇瞑眩　目が眩む。特に、薬がきつくて苦しむことをいう。『尚書』説命上に、「薬瞑眩ならずんば、厥の疾癒えざるが若し」とあり、孔伝に、「薬を服するに、必ず瞑眩の極にして、其の病乃ち除くが如し」という。17〇屈伸　かがむことと伸びること。「屈信」とも表記する。『周易』繋辞下伝に「尺蠖の屈するは、以て信びんことを求むるなり」とある。〇反覆手　手のひらをかえす。きわめてたやすいこと。また、簡単に起こること。『史記』陸賈伝に、「一偏将をして十万の衆を将いて越に臨ましめば、則ち越　王を殺して漢に降らんこと、手を反覆するが如きならんのみ」とある。19〇四門一句　四門は、四方の門。穆穆は、徳があってうるわしいさま。『尚書』舜典に、「四門に賓して、四門　穆穆たり」とある。一句は、今まさに天子が四方から都に賢者を招いていることをいう。

永裕陵にいます帝はまことに天の許したお方、筆を揮えば天にかかる天の川の如き文章が成った。かつては古き世に成った易の道にもよく通じておられ、漢の武帝の「秋風の辞」など物の数とはなさらなかった。龍のおどりあがる勢いと、虎の紋様の美しさとを兼ねそなえたその文章を前にしては、豹や猫の凡才ごときは揮

もおこがましいというもの。

そもそも私の困窮はまことに定めがあってのことだが、我が文章だけは帝のお目にとまっていた。聞けばあなたが策問に応ぜられたときにも、見事な答案に帝が「ああ、この者こそ」と口を開かれ、それが一日にして無数の人々に喧伝されて、同期の書生たちを驚倒させたとか。

そのあなたが、よもや二十年を経たいまになっても、なお道のりを歩むこと遅々としておられようとは思いもしなかった。きびしい言葉はよく効く薬に似て、はじめこそ目が眩んでも最後にはありがたがられるもの。世に「尺取り虫は人の常」とはいうけれど、あなたの場合だって間違いなくそうなのだ。都で四方の門を開いて美徳ある者を招いている今こそ、行きたまえ。この時をのがさぬように。

一八五六（施三二―六）

送張嘉父長官
張嘉父長官を送る

1 都城昔傾蓋　都城　昔　蓋を傾け
2 駿馬初服輈　駿馬　初めて輈に服く
3 再見江湖間　再び江湖の間に見れば
4 秋鷹已離韝　秋鷹　已に韝を離る
5 於今三會合　今に於て三たび会合し
6 毎進不少留　進む毎に少しきも留まらず

7 豫章既可識　豫章　既に識らる可し
8 瑚璉誰當收　瑚璉　誰か当に収むべき
9 微官有民社　微官　民社有り
10 妙割無鷄牛　妙割　鶏牛無し
11 歸來我益敬　帰り来たらば我れ益ます敬せん
12 器博用自周　器　博くして　用　自ら周し
13 百年子初筵　百年　子は初筵
14 我已迫旅酬　我れ已に旅酬に迫る
15 但當寄苦語　但だ当に苦語を寄せて
16 高節貫白頭　高節　白頭を貫かしむべし

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○張嘉父　張大亨のこと。嘉父はその字。湖州（浙江省）の人。元豊八年（一〇八五）の進士で、太学博士、司勲員外郎を経て直秘閣に至った。春秋の学を修め、『春秋通訓』『五礼例宗』の著がある（『直斎書録解題』巻三）。『春秋』について蘇軾に問うたことが、書簡「張嘉父に与う　七首」（『蘇軾文集』巻五三）の「その七」にみえる。○長官　官吏の汎称。大岳周崇の引く王注（趙次公）は、このとき張大亨は県令に任ぜられたとする（『四河入海』巻二二の二）。

1○都城一句　都城は、首都開封のこと。傾蓋は、初めて出会い親しく語り合うこと。孔子と程子が車のほろを傾けて親しく語り合った故事。「邵同年が戯れに賈収秀才に贈るに和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊四二五頁）を参照。

2○駿馬一句　輗は、車のながえ。大車のながえを輗、小車のそれは軏と称する。服は馬が車に就くこと。蘇軾が張大亨に初めて出会ったとき、駿馬が初めて車を走らせるべく輗に就くように、若き張大亨が才能をあらわしはじめて

いたことをいう。３４〇再見・秋鷹二句　韝は、鷹狩りのとき、鷹をとまらせるため腕に装着する皮製のこて。ゆごて。鮑照「東武吟」（『文選』巻二八）に、「昔は韝上の鷹の如きも、今は檻中の猨（猿）に似たり」とある。二人が再びまみえたのは、元豊八年、黄州流謫を経た蘇軾が、知登州に任ぜられて任地に赴く途上、泗州においてである（孔凡礼『蘇軾年譜』中冊六八八頁）。二句は、この時すでに張大亭がその才能を十分に発揮していたことをいう。５６〇於今・毎進二句　これまで三たび顔を合わせたが、そのつど張大亭に進境があったことをいう。前掲の書簡「張嘉父に与う　七首」の「その一」に、「都下　紛紛として、款奉を遂げず、別後　思念すること深し」とあり、また「汝陰（潁州）は僻陋」とあることなどから、孔凡礼はこの書簡が元祐七年に潁州で書かれたものと推定する。そして、蘇軾が潁州に赴くその前年、元祐六年に二人は都で三度目の対面をしていたのであり、今回は通算して四度目の対面だとする（『蘇軾年譜』下冊九八四頁、一〇三九頁）。７〇豫章　クスノキの類。豫樟とも表記する。『春秋左氏伝』哀公十六年に「豫章を抉きて以て人を殺して、而る後に死す」とあり、杜預の注に「豫章は、大木なり」とある。また、『淮南子』修務訓に、「楩柟・豫章の生ずるや、七年にして後に知る。故に以て棺舟を為る可し」とある。長い年月を経て成長する大木で、良質の木材となる。ここでは張大亭が逸材であることを喩える。８〇瑚璉　祭器の名。宗廟に供える穀物を盛る器で、張大亭が重要な務めを担うに足る人材であることを喩える。『論語』公冶長篇に、「子貢（名は賜）　問うて曰く、「賜や何如」と。子曰く、「女は器なり」と。曰く、「何の器ぞや」と。曰く、「瑚璉なり」と」とある。９〇微官一句　微官は、等級の低い官職。「張安道が「杜詩を読む」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊七九頁）を参照。民社は、人民と社稷（守り祭るべき土地と神）。『論語』先進篇に、「民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を読みて然る後に学ぶと為さん」とある。１０〇妙割一句　『論語』陽貨篇に、「子　武城に之きて弦歌の声を聞く。夫子莞爾として笑いて曰く、「鶏を割くに焉くんぞ牛刀を用いん」と」とある。一韓智翃は、「博識ノ君子ハ、大国ヲモ小国ヲモ、ヨク之（ヲ）治（ムル）ゾ。大器ハ大ニモ小ニモ用（フル）ゾ。……言（フココロ）ハ、此（ノ）人　大材（ナリト）雖（モ）、ヨク小国ヲモ治（ムル）程ニゾ」と記す。１２〇器博一句　『後漢書』伏湛・侯覇・宋弘伝の論賛に、「器博き者は近用無く、道の長ぜる者は其の功遠かなり」とある。一韓智翃は、「用ハ受用ゾ。大器ニハ

物ヲ大（イ）ニ入（ルル）モヨシ、小（シ）キ入（ルル）モヨシ。小器ニハ大（イ）ニ物ハ入レラレザルゾ」と記す。

13 14〇百年・我已二句　初筵は、饗宴のはじめ。『詩経』小雅「賓之初筵」に、「賓の初めて筵する、左右　秩秩たり」（筵は席に着くこと。秩秩は粛々として秩序あるさま）とある。旅酬は、祭祀の後で開かれる宴席の終わりに、多くの人が互いに杯を交わすこと。『礼記』曽子問に、「祭りは之を如何にせば則ち旅酬の事を行わざる」とある。15〇苦語　苦言に同じく、聞きづらいが役に立つ諫めのことば。忠告。『蘇軾詩注解（十四）』に収める作品番号一八〇七の詩の注を参照。16〇高節　節操を高くする。また、すぐれた節操、節義。『荘子』譲王篇に、「節を高くし行いを戻（励）まし、独り其の志を楽しんで、世に事めず」とある。

むかし都で初めて出会って語り合ったころは、あなたはながえに就いたばかりの駿馬のようだった。その後に地方に出て再会したときには、すでに鷹匠のゆごてから飛び立った秋の鷹になっておられた。今までに三たび顔を合わせたことになりますが、そのたびごとに、たゆむことなく新しい境地に進んでおられます。

長い年月を経て大材となる豫章（クスノキ）のごとく、あなたの才能ももはや世に知られてよいはず。貴重な瑚璉の器を宗廟に収め用いるように、重責に堪えうるあなたを登用する人はいないのでしょうか。

（今回の務めは）微官ではありますけれど（任地には）民もおれば社稷もありますから、庖丁の妙手が牛も鶏も選ばぬように、大器のあなたはみごとに治めることでしょう。そして任期が満ちて帰って来たあなたに再びお目にかかったなら、私はますます敬意を抱くことでしょう。「器が大きければ使い道も自ずと広いものだ」と。

人生百年、あなたが宴の始まりに臨んでいるとすれば、私の方はもう最後の杯のやりとりが近づいているようなものです。だから、今はただあなたには戒めのことばを贈りましょう。白髪あたまになるまで節義を貫いてください、と。

（担当　西岡　淳）

一八五七（施三一―七）

軾在潁州與趙德麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成德麟有詩見懷次其韻

軾　潁州に在りしとき、趙徳麟と同に西湖を治す。未だ成らずして揚州に改めらる。三月十六日、湖成る。徳麟　詩有りて懐わる。其の韻に次す

太山秋毫兩無窮　太山・秋毫　両つながら窮まり無し
鉅細本出相形中　鉅細　本と相形の中より出づ
大千起滅一塵裏　大千は一塵の裏に起滅す
未覺杭潁誰雌雄*　未だ覚えず　杭・潁　誰か雌雄せん
我在錢塘拓湖淥　我れ銭塘に在りて湖淥を拓く
大隄士女爭昌丰　大隄の士女　昌丰を争う
六橋橫絕天漢上　六橋　横ざまに天漢の上を絶り
北山始與南屏通　北山　始めて南屏と通ず
忽驚二十五萬丈　忽ち驚く　二十五万丈
老葑席卷蒼雲空　老葑　席巻して　蒼雲　空し
竭來潁尾弄秋色　竭来して潁尾に秋色を弄すれば
一水縈帶昭靈宮　一水　昭霊宮を縈帯す
坐思吳越不可到　坐ながら呉越を思えども到る可からず
借君月斧修疐龐　君が月斧を借りて疐龐を修す

15 二十四橋亦何有
16 換此十頃玻璃風
17 雷塘水乾禾黍滿
18 寶釵耕出餘鸞龍
19 明年詩客來弔古
20 伴我霜夜號秋蟲**

二十四橋も亦た何か有らん
此の十頃　玻璃の風に換えんや
雷塘　水乾いて　禾黍満つ
宝釵　耕し出だして　鸞龍を余す
明年　詩客　来たりて古を弔わば
我に伴いて霜夜に秋の虫号かん

〔原注〕來詩云、與杭爭雄（来詩に云う、「杭と雄を争う」と）
〔**〕德麟見約來揚寄居、亦有意求揚倅（徳麟　揚に来たりて寄居せんことを約せらる。亦た揚の倅を求むるの意有り）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。ときに知揚州として揚州に在った。
○潁州　治は安徽省阜陽市に在った。○趙徳麟　趙令畤のこと。徳麟はその字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。趙令畤のもとの詩は伝わらない。○西湖　潁州の西湖をいう。○揚州　治は江蘇省揚州市に在った。蘇軾が知揚州に除せられたのは元祐七年正月のことであった（孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇二二頁）。
1○太山一句　太山は、泰山のこと。きわめて大きなもののたとえ。秋毫は、秋になって生え変わった鳥獣の細い毛のこと。ここでは太山に対してごく微小なもののたとえ。『荘子』斉物論篇に、「天下に秋毫の末より大なるは莫く、而して太山も小と為す」とある。無窮は、無限であること。同じく『荘子』斉物論篇に、「是も亦た一無窮なり。非も亦た一無窮なり」とある。一句は、杭州の西湖も、それより小さな潁州の西湖も、絶対的な道の立場から見れば等しく無限であることをいう。2○鉅細　大小をいう。1句の太山と秋毫の対照と同じ。○相形　相対によって形状が

はっきりすること。『老子』第二章に、「故に有無相生じ、難易相成り、長短相形わし、高下相傾け、音声相和し、前後相随う」とある。3〇大千　仏教でいう「三千大千世界」のこと。蘇軾は、「端午に諸寺に遍く遊んで禅の字を得たり」詩（『合注』巻一八）でも、「忽ち登る　最高の塔、眼界　大千を窮む」と詠じている。「辯才老師　龍井に退居し、復た出入せず。……」詩の注（『蘇東坡詩選』二六三頁）も参照。〇起滅　生起することと消滅すること。〇一塵　微小なもののたとえ。『蘇軾詩注解（二）』に収める作品番号一六〇五の詩の注を参照。4〇杭潁　杭州・潁州双方の西湖をいう。蘇軾は知杭州として、また知潁州として、それぞれの地の西湖の改修工事をおこなった。〇雌雄　優劣をいう。李白「赤壁の歌、送別」（『李太白全集』巻八）に、「二龍　争い戦いて雌雄を決し、赤壁　楼船　地を掃いて空し」とある。5〇銭塘　いまの杭州市。6〇大隄　『楽府詩集』巻四八にみえる無名氏「襄陽楽」に、「大隄の諸女児、花艶にして郎の目を驚かす」とある。ここでは、杭州の西湖に蘇軾が築いた堤、いわゆる蘇堤のこと。〇昌丰　昌は、若々しく美しいこと。丰は、体つきがふっくらして豊かなこと。『詩経』鄭風「丰」に、「子の丰なる、我を巷に俟つ、予の送らざるを悔やむ、子の昌なる、我を堂に俟つ、予の将かざるを悔やむ」とあり、毛伝に「丰は豊満なり」、「昌は盛壮の貌なり」とある。7〇六橋　蘇堤にかかる六つの橋。『咸淳臨安志』巻二二に、「蘇堤南来第一橋」から「第六橋」までの六橋として、「映波橋」・「鎖瀾橋」・「望山橋」・「圧堤橋」・「東浦橋」・「跨虹橋」の名がみえる。〇横絶　橋が西湖にかかっていることをいう。絶は、わたる、よぎるの意。『史記』留侯世家に、「（上）歌いて曰く、「鴻鵠は高く飛んで一挙に千里す、羽翮已に就って四海を横絶す……」と」とある。〇天漢　天の川。『詩経』小雅「大東」に、「維れ天に漢有り、監みれば亦た光有り」とある。ここでは西湖を天の川になぞらえていう。8〇北山　杭州西湖の北に聳える諸山のこと。蘇軾には、「連日、王忠玉・張金翁と西湖に遊び、北山の清順・道潜の二詩僧を訪ねて……」（『蘇軾詩注解（五）』に収める作品番号一六五二の詩）などのように、西湖の北山が詩題や詩句にみえる作品がある。〇南屏　西湖の南にある山の名。「南屏の晩鐘」は西湖十景の一つに数えられる。蘇軾には「南屏の謙師を送る　幷びに引」（『合注』巻三一）がある。9 10〇忽驚・老葑二句　二句は、蘇軾が杭州西湖の湖面の半ばにはびこっていた老葑（まこもの類）を取り除く大がかりな浚渫工事をおこなったことをいう。蘇軾「杭州

にて度牒を乞いて西湖を開かんことを奏する状」（『蘇軾文集』巻三〇）に、「熙寧中、臣　本州に通判たりしとき、則ち湖の葑合せしは、蓋し十に二三なるのみ。今に至る纔か十六、七年の間に、遂に其の半ばを堙塞す。父老皆な言う、「十年以来、水浅く葑横がり、雲の空を翳うが如く、倏忽として便ち満つ、更に二十年すれば、西湖無からん」と。……輒ち已に官を差わして湖上の葑田を打量るに、計せて二十五万余丈」とある。『蘇軾詩注解（八）』に収める作品番号一六九〇の詩の注も参照。席巻は、蓆を巻くように余さずに取り除くこと。『漢書』項籍伝の賛に賈誼の「過秦論」を引いて、「天下を席巻し、宇内を包挙し、四海を囊括し、八荒を幷呑せんとするの心有り」とある。蒼雲は、老葑が雲のごとくに生い茂って、湖面を覆っているさまをいう。11〇揭来一句　去来。揭は去るの意。揭来は、そののちと解することもある（『蘇東坡詩集』第二冊三〇頁を参照）。潁尾は、潁水の淮水への合流点。『春秋左氏伝』昭公十二年に、「楚子　州来に狩りし、潁尾に次る」とあり、杜預の注に、「潁水の尾は下蔡に在り」とある。ここでは潁州をいう。一句は、蘇軾が知潁州として元祐六年閏八月に着任した（孔凡礼『蘇軾年譜』下冊九九六頁）ことをいう。12〇縈帯　帯のようにめぐること。杜甫「修学寺に遊ぶ」詩（『杜詩詳注』巻九）に、「径石　相縈帯し、川雲　自ら去留す」とある。〇昭霊宮　張龍公を祀った龍神祠。蘇軾に「昭霊侯廟の碑」（『蘇軾文集』巻一七）がある。『蘇軾詩注解（十六）』に収める作品番号一八一八の詩の注も参照。13〇呉越　江蘇と浙江のこと。ここではとくに杭州をいう。14〇月斧　月の形を整えるために用いる道具。太和年間に鄭仁本のいとこが嵩山に行ったときに一人の男に出会った。その男は自分が月のくぼみを修繕する職人であるといって、持っている包みを開いて見せた。「因りて襆を開けば、斤鑿数事・玉屑両裹有り」（『酉陽雑俎』巻一）とある。月斧はこの斤のこと。〇瞳朧　潘岳「秋興の賦」（『文選』巻一三）に、「月は瞳朧として以て光を含み、露は凄清として以て凝冷す」とあり、李善注に『埤蒼』を引いて「瞳朧は明らかならんと欲するなり」とある。15 16〇二十・換此二句　二十四橋は、揚州の名所。杜牧「揚州の韓綽判官に寄す」詩（『全唐詩』巻五二三）に、「二十四橋　明月の夜、玉人　何れの処にか簫を吹くを教えん」とある。十頃は、潁州西湖をさす。頃は、百畝のひろさをいう。玻璃は、水晶。『旧唐書』高宗紀下に、「支汗郡王　碧き玻璃を献ず」とある。ここでは、西湖の湖面の美しさをいう。趙令畤『侯鯖録』巻一によれば、二句は、欧陽修が揚州か

ら潁州に着任したとき、西湖を眺めて揚州を懐かしみつつ詠じた「西湖にて戯れに作りて同に遊ぶ者に示す」詩（『欧陽文忠公文集』巻一二）に、「都て二十四橋の月を将て、換え得たり　西湖十頃の秋」とあるのを踏まえている。17○雷塘　隋の煬帝を改葬した地。揚州の東北に在る。『隋書』煬帝紀に、「大唐　江南を平らぐの後、雷塘に改葬す」とある。蘇軾は「虢国夫人夜遊の図」詩（『合注』巻二七）でも、「人間に俯仰して今古と成る、呉公台下　雷塘の路」と詠じている。○禾黍　いねときび。18○宝釵　宝石の飾りのあるかんざし。李賀「美人梳頭の歌」（『李賀歌詩編』巻四）に、「纖手　却って盤ぬ　老梳の色、翠滑らかにして宝釵は簪さんとするも得ず」とある。○鸞龍　鳳凰と龍。ここではかんざしの飾りのこと。19○詩客　ともに詩を詠じる訪れ人。ここでは趙令畤をいう。白居易「朝より帰り事を書して元八に寄す」詩（『白居易集箋校』巻六）に、「禅僧と詩客と、次第に来たりて相看る」とある。○弔古　往昔をしのぶこと。蘇軾は「是の日　下馬磧に至り、北山の僧舎に憩う……」詩（『蘇東坡詩集』第一冊四六六頁）でも、「客来たって空しく古を弔す、清涙　悲笳に落つ」と詠じている。20○秋虫　杜甫「除架」詩（『杜詩詳注』巻八）に、「秋虫　声去らず、暮雀　意は如何」とある。○［＊＊］倅は、副官。宋では州の通判を指す。

泰山も秋に生えかわる獣の細毛もどちらも存在は無限であって、大小の違いは相対によって生まれるものです。三千大千世界も塵ひとつの中で生じたりほろんだりするわけですから、杭州の西湖と潁州の西湖のどちらが勝っているかを比べることなどできないように思います。

わたしが杭州で西湖の改修をしましたら、築いた堤の上に女性たちが集って美しさを競い合っていました。その堤には六つの橋が天の川のような湖水を横切ってかかっていて、北山と南屏山とがはじめて通じました。何と二十五万丈の湖が、まこもをきれいに取り除いたら黒雲が消えてなくなったかのようでした。そののちは潁州にやって来て秋の風情を楽しんでおり、西湖の水が昭霊宮をめぐるように流れています。

何かにつけて杭州を懐かしく思い起こしますが行くことがかなわないので、貴殿のすぐれた腕前をお借りし

ておぼろ月のように美しい西湖の改修をはじめました。ここ揚州には名高い二十四橋がありますが、水晶のような潁州西湖の湖面をわたる風と比べものになりましょうか。

煬帝ゆかりの雷塘も干上がって雑穀が茂っています。掘ってみれば鳳や龍の飾りがついた簪が出てくることでしょう。来年貴殿が往時をしのぶためにお出でになったら、ともに詩を作って霜のおりる夜に秋の虫のように吟じることといたしましょう。

一八五八（施三二―八）

次韻徳麟西湖新成見懐絶句
徳麟が西湖新たに成りて懐わるる絶句に次韻す

1 壷中春色飲中仙*　壷中の春色　飲中の仙
2 騎鶴東來獨惘然　鶴に騎って東来　独り惘然
3 猶有趙陳同李郭　猶お趙・陳の李・郭に同じき有り
4 不妨同泛過湖船　妨げず　同に湖を過ぐる船を泛ぶるを

〔原注〕謂洞庭春色也（洞庭の春色を謂うなり）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙徳麟　趙令畤のこと。前の詩の詩題の注を参照。趙令畤のもとの詩は伝わらない。

1○飲中仙　杜甫「飲中八仙歌」（『杜詩詳注』巻二）を踏まえていう。2○騎鶴　殷芸の『小説』（『説郛』巻四六下では『商

芸小説』として、以下の文を収める。殷芸の姓を商の字に作るのは、宋の太祖の父である趙弘殷の殷の字を避けたものである）に、「客の相従う有りて、各おの志す所を言う。或るひとは揚州刺史と為らんことを願い、或るひとは貲財多からんことを願い、或るひとは鶴に騎って上昇せんことを願う。其の一人曰く、「腰に十万貫を纏い、鶴に騎って揚州に上らん」と。三者を兼ねんと欲するなり」とある。『蘇東坡詩集』第二冊五四六頁の注を参照。○惘然　気落ちしてぼんやりするさま。杜甫「秦州を発す」詩（『杜詩詳注』巻八）に、「豈に復た老夫を慰めんや、惘然として久しく留まり難し」とある。3○趙陳　趙は趙令畤、陳は陳師道のこと。陳師道については、『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。○李郭　後漢の李膺と郭泰（太）のこと。太原の人郭泰、字は林宗（『後漢書』では范曄の父范泰の諱を避けて郭太と表記する）は、都洛陽で河南尹の李膺（字は元礼、『後漢書』に伝がある）と貴賤を越えた交わりを結んだ。『後漢書』郭太伝に、「（郭太）後に郷里に帰らんとするに、衣冠諸儒の送りて河上に至るもの、車は数千両なり。林宗唯だ李膺と舟を同じくして済る。衆賓　之を望んで、以て神仙と為す」とある。○［原注］洞庭春色は酒の名。知潁州在任のおりに、趙令畤が蘇軾に飲ませてくれた。「洞庭の春色　并びに引」（『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八三七の詩）の引の注を参照。

潁州にいた頃は壺の中の「洞庭の春色」を楽しんだ酔いどれ仙人が、鶴に騎って東のかた揚州に来て一人ぼんやりとしています。そちら潁州では、いまもあなたや陳どのが、かの李膺と郭太よろしく、西湖に船を浮かべてともに遊ぶことがおできになるのですね。

（担当　中　裕史）

一八五九（施三二―九）

再次韻徳麟新開西湖

再び徳麟が「新たに西湖を開く」に次韻す

1 使君不用山鞠窮
2 饑民自逃泥水中
3 欲將百瀆起凶歳*
4 免使甑石愁揚雄
5 西湖雖小亦西子
6 縈流作態清而丰
7 千夫餘力起三閘
8 焦陂下與長淮通
9 十年憔悴塵土窟
10 清瀾一洗啼痕空
11 王孫本自有仙骨
12 平生宿衛明光宮
13 一行作吏人不識
14 正似雲月初朦朧
15 時臨此水照冰雪
16 莫遣白髪生秋風
17 定須却致兩黄鵠
18 新與上帝開濯龍
19 湖成君歸侍帝側

使君　山鞠窮を用いずして
饑民　自ら泥水の中に逃る
百瀆を将て　凶歳を起こして
甑石をして揚雄を愁えしむるを免れしめんと欲す
西湖は小なりと雖も亦た西子
縈り流れて態を作り　清くして丰かなり
千夫の余力　三閘を起こして
焦陂の下　長淮と通ず
十年憔悴す　塵土の窟
清瀾一洗して啼痕を空しくす
王孫　本と自り仙骨有り
平生宿衛す　明光宮
一たび行きて吏と作るも　人識らず
正に雲月の初め朦朧たるに似たり
時に此の水に臨みて氷雪を照らせ
白髪をして秋風を生ぜしむる莫かれ
定めて須く却って両黄鵠を致して
新たに上帝の与に濯龍を開くべし
湖成らば　君帰りて帝の側に侍せん

20　燈花已綴叙頭蟲　　燈花已に綴る　叙頭の虫

〔原注〕予以潁人苦饑、奏乞留黄河夫萬人修境内溝洫、詔許之、因以餘力浚治此湖（予潁人の苦だ饑うるを以て、黄河の夫万人を留めて境内の溝洫を修めしむるを乞うを奏し、詔ありて之れを許さる。因りて余力を以て此の湖を浚治す）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙徳麟　趙令畤のこと。徳麟はその字。元祐六年から、簽書潁州公事の任にあった。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。趙令畤のもとの詩は伝わらない。○西湖　潁州の西湖のこと。『蘇東坡詩集』第二冊一一五頁を参照。

1○使君　州の知事をいい、ここでは元祐六年から知潁州であった蘇軾自身のことをさす。○山鞠窮　泥水に入っても身体にダメージが無いようにする防湿の薬。『春秋左氏伝』宣公十二年に、楚に敗れんとする蕭の還無社を助けようとする申叔展の言葉のなかに、「麦麴（麦のもやし。内乱を防ぐ手立てのたとえ）有るか」「山鞠窮（薬草芎窮。外患を防ぐ手立てのたとえ）有るか」とある。それについての杜預の注には「麦麴・鞠窮は以て湿を禦ぐ所にして、（還）無社をして泥水の中に逃れしめんと欲す」という。2○饑民　蘇軾は元祐六年十一月に出した「淮南にて糴（かいよね）を閉じるを奏する状　二首」（『蘇軾文集』巻三三）ならびに同十二月の「度牒して糴斛斗の準備を賜り、淮浙の流民を賑済するを乞う状」（『蘇軾文集』巻三三）に潁州近郊の民が、旱魃のために糧食が欠乏して困窮をきわめ、流民も多い状況を奏上している。○逃泥水中　ここでは「山鞠窮」の注に引く『春秋左氏伝』の故事を踏まえているが、原注にある黄河を修復するための人夫を潁州一帯の水路の整備にあてたことを指していう。3○百瀆　瀆は、用水路、耕地間を流れる水路をいう。○凶歳　飢饉の歳。『孟子』告子上篇に「富歳には子弟に頼きもの多く、凶歳には子弟に暴しきもの多し」とある。4○免使一句　甑石の甑は、儋と同じ。もとは穀物を計量する口の狭い陶器を指すが、転じて少量の糧食のことをいう。『漢書』揚雄伝に「家産　十金に過ぎず、乏しくして儋石の儲え無きも、晏如たり」

とある。ここでは、蜀出身の揚雄（字は子雲）を自らにたとえて、西湖を浚渫したことによって、糧食の心配もなくなることをいう。5〇西湖一句　蘇軾は、杭州通判であった熙寧六年（一〇七三）に、「西湖を把って西子に比せんと欲すれば、淡粧　濃抹　総て相宜し」と、西湖の美麗なさまを、春秋時代の越国の美女西施に擬えた「湖上に飲せしが初めは晴れ後は雨ふれり　二首」その二（『蘇東坡詩集』第二冊四八八頁）を詠じている。ここでは、杭州の西湖と比べて小さい潁州の西湖も、また西施のように美しいという。6〇縈流　めぐりながれること。皎然「渓雲」詩（『杼山集』巻六）に「舒巻して意何ぞ窮まらん、縈り流れて復た空に帯ぶ」と雲のさまを詠じている。ここでは西湖の水の動きをいう。〇作態　さまざまな姿態を示すこと。『後漢書』曹世叔妻伝に「入りては則ち髪を乱して形を壊し、出でては則ち窈窕として態を作す」とある。〇丰　肉付きが豊かなさまをいう。『詩経』鄭風「丰」に「子の丰なる我を巷に俟つ」とあり、その鄭玄注に「丰は豊満なり」という。沈約「少年新婚、之が為に詠ず」詩（『玉台新詠』巻五）に「丰容　姿顔好く、便辟にして言語に工みなり」とある。7〇余力　『論語』学而篇に「行って余力有らば、則ち以て文を学べ」とある余裕があることをさすが、ここでは原注にあるように、本来黄河修復の任にあるべき人夫を、水路修復に従事させたことをいう。〇三閘　西湖の三か所の水門。『蘇軾詩注解（十七）』の作品番号一八二八の詩に「城を縈って枯瀆を理め、閘を放って膠艇を起こさん」の原注に「清河・西湖の三閘、君を督して之を成さしむ」とある。8〇焦陂　潁州の北に隣接する亳州（安徽省）は、古代には焦国と称されていた。その地の池をいう。熙寧元年（一〇六八）に亳州知事であった欧陽修は「焦陂を憶う」詩（『欧陽文忠公文集』巻九）に「焦陂の荷花　水光を照らし、未だ十里に到らずして花香を聞く、焦陂　八月に新たに酒熟し、秋水に魚肥えて鱠は玉の如し」と詠じた。蘇軾はその豊かな焦の池を、この詩から連想していたのであろう。〇長淮　淮河のこと。杜甫「乾元中、同谷県に寓居して作れる歌　七首」その四（『杜詩詳注』巻八）に「長淮　浪高くして　蛟龍怒る、十年見ず　来たるは何れの時ぞ」とある。9〇憔悴　疲れ衰えているさま。李白「王昭君　二首」その一（『李太白全集』巻四）に「燕支　長に寒く　雪　花を作す、蛾眉憔悴して胡沙に没す」とある。〇塵土窟　俗塵があつまった様をいう。蘇軾にはほかに「次韻して王鞏に答う」詩（『合注』巻一九）に「我に方外の客有り、顔は瓊の英の如く、十年塵土の窟にあるも、一

寸の氷雪清し」とある。ここでは、窟とは、郭璞「遊仙詩　七首」その一（『文選』巻二一）に「京華は游俠の窟にして、山林は隠遯の棲なり」とある、あつまるところの意と捉えておく。10〇清瀾　清らかな波。『孟子』尽心上篇に「水を観るに術有り、必ず其の瀾を観よ」とあり、その趙岐の注に「瀾は水中の大波なり」とある。韋応物「再び龍門に遊びて旧侶を懐う」詩（『韋蘇州集』巻七）に「靄靄として都城を眺み、悠悠として清瀾を俯す」とある。〇一洗　きれいに洗い流すこと。蘇軾「浄居寺に遊ぶ　幷びに叙」詩（『合注』巻二〇）では、「願わくは二聖に従って往き、千劫の非を一洗せん」とある。11〇王孫一句　趙令畤が宋の太祖の子燕懿王の玄孫であるゆえに王孫という。仙骨は優れた資質が備わっていることをいう。杜甫「孔巣父が病と謝して帰り、江東に游ぶを送り、兼ねて李白に呈す」詩（『杜詩詳注』巻一）に「自ら是れ君の身には仙骨有り、世人那ぞ其の故を知るを得ん」とある。12〇宿衛　禁中に宿直して警護すること。羅鄴「老将」詩（『全唐詩』巻六五四）に「年年宿衛して天顔近く、曽て功勲を把って建章に奏さる」とある。〇明光宮　漢の武帝の建てた宮殿。その名を借りて宋の天子の宮殿をさす。蘇軾「劉莘老」詩（『蘇東坡詩集』第二冊一五九頁）の注を参照。13〇一行作吏　官吏となって自由を奪われること。嵇康「山巨源に与えて交りを絶つ書」（『文選』巻四三）に「山沢に游び、魚鳥を観、心甚だ之を楽しむ。一たび行きて吏と作らば、此の事便ち廃せん。安くんぞ能く其の楽しむ所を舎てて、其の懼るる所に従わんや」とある。〇人不識　世人は気がつかないこと。韓愈「嗟哉董生行」（『韓昌黎集』巻二）に「嗟哉　董生　孝にして且つ慈しみあり、人　識らずして　惟だ天翁（お天道さま）の知る有るのみ」とある。14〇朦朧　月の光がおぼろげなことをいう。白居易「嘉陵　夜懐い有り　二首」その二（『白居易集箋校』巻一四）に「明ならず　闇ならず　朦朧たる月、暖に非ず　寒に非ず　慢慢たる風」とある。15〇氷雪　真っ白い肌のさまをいう。『荘子』逍遥遊篇に「藐かなる姑射の山に、神人の居る有り。肌膚は氷雪の若く、綽約たること処子の若し」とある。16〇莫遣一句　白居易「初めて官を貶せられて望秦嶺を過ぐ」詩（『白居易集箋校』巻一五）に「草草として家を辞して後事を憂う、遅遅として国を去りて前途を問う、望秦嶺上頭を回らして立てば、限り無き秋風　白鬢を吹く」とあり、劉禹錫「蘇十郎中が病と謝して閑居せし時……」詩（『劉禹錫集箋証』巻二四）に「一巻の素書　永日を銷し、数茎の斑鬢　秋風に対す」とある。ここでは秋風に老身をさら

して空しく過ごすことがないようにという意。17〇両黄鵠　神の託宣であることを意味する。『漢書』翟方進伝に、翟方進（字は子威）が、大貯水池を撤去したことによって、旱害に見舞われ、民の怨みをかったが、ときの童謡に「陂を壊るは誰ぞ　翟子威、我に豆食を飯せしめ芋魁を羹にせしむ、反せんか覆せんか　陂は当に復すべし、誰か云う者ぞ　両黄鵠」とうたわれていたという。その「両黄鵠」の顔師古の注には「言を神有りて来たって之を告ぐるに託す」とある。蘇軾「子由の「柳湖久しく涸れて、忽ち水有り……」に和す　二首」その一（『蘇東坡詩集』第二冊二五〇頁）の注を参照。なお蘇軾は元祐五年杭州の知事の任にあって「杭州にて度牒して西湖を開くを乞う状」（『蘇軾文集』巻三〇）を作り、この童謡をそこにも引用している。18〇濯龍　天帝の池。張衡「東京の賦」（『文選』巻三）に「濯龍芳林、九谷八渓」とあり、その薛綜の注に「洛陽図経に曰く、「濯龍は池の名」と、故に歌に曰く、「濯龍は望むこと海の如く、河橋は渡ること雷に似たり」と」とある（芳林は苑の名、九谷・八渓は養魚池の名）。『後漢書』許楊伝に「汝南に旧と鴻郤陂有り、成帝の時に丞相の翟方進奏して之を毀敗す。建武中に太守の鄧晨　其の功を修復せんと欲す、（許）　楊が水脈に暁るきことを聞きて、召して与に之を議す。（許）　楊曰く、「昔　成帝は（翟）　方進の言を用い、尋いで自ら夢みて天に上るに、天帝怒りて曰く、「何の故にか我が濯龍淵を敗る」と。是の後　民は其の利を失いて、多く飢困を致す」とある。20〇燈花一句　燈花は、燈心の先端の燃えかすが花の形を成しているもの。喜事の予兆である。韓愈「燈花を詠じて、侯十一に同ず」詩（『韓昌黎集』巻一〇）に「今夕　知んぬ　何の夕べぞ、花は然ゆ錦帳の中、自ら能く雪に当たって暖かに、那ぞ肯て春を待ちて紅ならん。黄裏　金粟を排し、釵頭　玉虫を綴る、更に煩わす　喜事を将て、来たって主人公に報ずることを」とある。〇［原注］　『合注』には無いが、『施注』に拠って付す。

知事が防湿薬の「山鞠窮」を使うこともなく、飢えた民ぐさは自分たちの力で泥水のなかに（かえって）生活難を逃れることができた。あちこちの水路を修復することで（生活のかてを得て）飢饉から立ち直り、揚雄の如く、わずかな糧食しかないことに悩まないようにさせたのだ。

二二

潁州の西湖は小振りながら（杭州のそれと同じく美女の）西施のようで、めぐり流れて科をつくって清らかで艶やか。黄河修復のための千人の人夫の力を借りて、三つの水門を作って、焦陂の下で淮河につなげたのである。

ここ十年は塵土に埋もれてやつれていたが、清らかな波にさっぱりと洗われて涙のあとも無くなった。天子の血をひく趙令畤どのはもともと卓抜な気骨の持ち主で、つねづねは（天子の側近として）明光宮に宿直しておられたのだ。

このたび地方の官となられたのに、世人には知られていないのは、さながら雲をおびた月がはじめはおぼろであるかのようなのだ。

ときどきこの湖水に臨んで氷雪のごとく清らかなお姿をお見せください、白髪を秋風にさらして託つことのありませんように。きっと神のお告げで（かの翟方進とは逆に）あらたに天帝の濯龍の池の工事をされねばならないでしょう。

西湖の工事が完成したあかつきには、あなたは朝廷に帰って皇帝のおそばにお仕えすることになりましょう。なぜなら燈心がすでに吉兆を示す花を結んでおりますゆえ。

（担当　中　純子）

一八六〇（施三二―一〇）

到官病倦未嘗會客毛正仲惠茶乃以端午小集石塔戲作一詩爲謝

官に到りて倦を病み、未だ嘗て客を会せず。毛正仲　茶を恵む。乃ち端午を以て石塔に小集し、戯れに一詩を作って謝を為す

1 我生亦何須
2 一飽萬想滅
3 胡爲設方丈
4 養此膚寸舌
5 爾來又衰病
6 過午食輒噎
7 謬爲淮海帥
8 每愧廚傳闕
9 爨無欲清人
10 奉使免内熱
11 空煩赤泥印
12 遠致紫玉玦
13 爲君伐羔豚
14 歌舞菰黍節
15 禪窗麗午景
16 蜀井出冰雪
17 坐客皆可人
18 鼎器手自潔
19 金釵候湯眼

我が生　亦た何をか須めん
一飽すれば　万想滅す
胡為れぞ　方丈を設けて
此の膚寸の舌を養わん
爾来　又た衰病
午を過ぎて食すれば輒ち噎ぶ
謬って淮海の帥と為り
毎に廚伝の闕くるを愧づ
爨ぐに清しからんと欲する人無く
使を奉じて内熱を免る
空しく赤泥の印を煩わして
遠く紫玉玦を致す
君が為に羔豚を伐って
歌舞せん　菰黍の節
禅窓　午景麗しく
蜀井　氷雪を出だす
坐客　皆な可人
鼎器　手自ら潔くす
金釵　湯眼を候い

20 魚蟹亦應訣　　魚蟹　亦た訣に応ず
21 遂令色香味　　遂に色香味をして
22 一日備三絕　　一日に三絶を備えしむ
23 報君不虛授　　君に虚しく授けざるを報ず
24 知我非輕啜　　我が軽がろしく啜むに非ざるを知れ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○毛正仲　毛漸のこと。正仲はその字。衢州江山（浙江省）の人。進士に及第して地方官を歴任し、元祐七年六月には江東両浙転運副使に在官していた（『続資治通鑑長編』巻四七四）。後に吏部右司郎中として入朝し、また陝西転運使などの地方官をへて、五十九歳で没し、龍図閣待制を贈られた。『宋史』巻三四八に伝がある。○石塔　揚州にあった寺の名。蘇軾に、石塔寺とそれにまつわる故事を詠じた「石塔寺　幷びに引」（『合注』巻三五）がある。

3○方丈　一丈四方のこと。『孟子』尽心下篇に「食前方丈、侍妾数百人なるは、我れ志を得るも為さざるなり」とある。趙岐の注によれば、食前方丈とは、大量のご馳走が目の前に並んでいること。4○膚寸　わずかの長さ。『春秋公羊伝』僖公三十一年に、「膚寸にして合す」とある。何休の解詁によれば、膚は四本の指を並べた長さ、寸は指一本の長さ。「膚寸の舌」に類する表現として、『史記』平原君伝に、「毛先生、三寸の舌を以て、百万の師よりも彊し」とある。6○過午　仏教の戒律では、僧たちは正午が過ぎてからは食事をしない。○噎　むせる。食べ物がのどにつかえる。78○謬為・毎愧二句　淮海は、揚州のこと。『尚書』禹貢に、「淮海は惟れ揚州」とある。廚伝は、料理場と宿舎。来客をもてなす飲食や宿のこと。『漢書』宣帝紀の元康二年の詔に、「或いは擅いままに繇役を興し、廚伝を飾り、称えて使客を過ごす」とある。顔師古の注に韋昭を引いて、「廚は飲食を謂い、伝は伝舎を謂う」という。蘇軾「揚州の公使の銭を申明する状」（『蘇軾文集』巻三五）は、揚州は交通の要衝で、来客の接待に費用がかさむことを述べる。二句は、自分は揚州という豊饒な土地の長官であるのに、不十分な接待しかできずに慚愧の念を抱くこ

とをいう。9 10〇爨無・奉使二句　爨は、飯を炊くこと。奉使は、つつしんで天子の使者となる意で、地方官を務めることをいう。内熱は、体内に熱を発する病気。『荘子』人間世篇に、国使として斉に赴くことになった楚の葉公子高が、「吾が食や粗を執りて滅からず、爨に清しきを欲する人無きに、今吾れ朝に命を受けて夕べには氷を飲めり。我れ其れ内に熱あるか」と嘆く一節がある。「爨に清しきを欲する人無し」とは、煮炊きにあまり火を使わないので台所に熱がこもらず、料理人たちも涼みたいと思わない意で、食事が質素なこと。二句は、自分の食事は葉公子高と同じく粗末なものだが、天子の命を奉じて使者となっても、子高のように体内で熱を出すことは免れていることをいう。11〇赤泥印　茶の包みに押された印。劉禹錫「西山の蘭若に茶を試みる歌」（『劉禹錫集箋証』巻二五）に「何ぞ況んや　蒙山・顧渚の春、白泥赤印　風塵に走るをや」（蒙山・顧渚は銘茶の名）とある。12〇紫玉玦　紫玉は、紫色の宝玉。祥瑞を招くとされる。『宋書』符瑞志下に、「黄銀紫玉、王者　金玉を蔵せざれば、則ち黄銀紫玉の光　深山に見らわる」とある。玦は、おびだまの一つ。環状で一部分が欠けた佩玉。紫玉玦は、ここでは餅茶を指す。宋の蔡襄『茶録』上篇・論茶「色」によれば、餅茶はその表面に油が塗られており、青・黄・紫・黒などの色を呈する。13〇伐　屠ること。〇羔豚　子羊と子豚。14〇菰黍節　端午節のこと。菰黍は、ちまき。『藝文類聚』巻四「歳時中」五月五日の条に引く『風土記』に、「仲夏の端五、鶩を烹て、角黍をくらう。端は、初なり。五月の初五日を謂うなり。又た菰葉を以て粘米を裹みて煮熟す、之を角黍と謂う」とある。15〇禅窓　禅寺（石塔寺）の窓。〇午景　昼の日光。16〇蜀井　揚州の蜀岡という丘にあった井戸を指す。〇氷雪　清らかな井戸水のこと。17〇坐客　欧陽修「新茶を嘗めて、聖兪に呈す」詩（『欧陽文忠公文集』巻七）に、「泉甘く器潔くして天色好し、坐中揀択して客も亦た嘉し」とある。〇可人　とりえのある人物。『礼記』雑記下に、「孔子曰く、管仲は盗に遇い、二人を取り、上げて以て公の臣と為す。曰く、「其の与に遊ぶ所辟なればなり、可なる人なり」と」とある。孔穎達の疏によれば、可人は信頼できる人をいう。18〇鼎器　茶道具のこと。19〇金釵　金のかんざし。ここでは借りて女性を指す。白居易「思黯が戯れに贈るに酬う」詩（『白居易集箋校』巻三四）に、「鍾乳三千両、金釵十二行」とあり、その自注に「思黯は自ら前後鍾乳三千両を服して甚だ力を得、而して歌舞の妓の頗る多きを誇る」とある。〇候湯眼　沸いた湯の泡（眼）

をうかがい見ること。20〇魚蟹　魚眼と蟹眼。湯が沸き始めたときの小さな泡を蟹眼といい、大きくなった泡を魚眼という。「試院に茶を煎る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三三六頁）を参照。以上の二句は、官妓たちの点茶のわざが巧みであることをいう。21 22〇遂令・一日二句　色香味は、白居易「荔枝図の序」（『白居易集箋校』巻四五）に、「一日にして色変じ、二日にして香変じ、三日にして味変じ、四五日より外は、色・香・味尽く去る」とある。三絶は、特に優れた三つのもの。贈られたお茶を褒める意を込める。

わが人生に今さら何を求めようか、満腹にさえなればすべての想念が消えていく。ご馳走を山ほど作っても、養うのはたかだかこの一寸の舌にすぎないのだ。ましてここに赴任してからはさらに老い衰えて病気がちになり、お昼過ぎに（戒律を犯して）食事をとると、いつだって喉につかえてしまう始末。

分不相応にも交通の要衝である揚州の長官となって、いつも（予算不足に因る）もてなしの粗末さを恥ずかしく思っている。煮炊きにあまり火を使わないので炊事場が（涼を入れるほどには）暑くなることもなく、あの葉公子高のように食事も質素なものだ。それでも天子の命を受けた使者でありながら、（なさけないことに）子高のように腹が熱くなってしまうことは免れている。

このたびは私のごときつまらぬ者に、封泥付きの荷に仕立てて、遠路はるばる紫玉の銘茶を送ってくださいました。ご厚意に感じて、立派なお茶をいただくにふさわしいよう、まず子羊や子豚を屠り、歌と踊りの宴を開いて（例の如く）端午の節句を祝いましょう。ここ石塔寺の窓からは麗しい日光が差し込み、蜀岡の井戸から湧き出た氷雪のような清水を準備しました。同席の方々は立派な人物ばかりで、茶道具は私自ら手で洗いあげてあります。官妓たちはお茶の淹れ方が上手で、沸し具合もちょうどいい具合です。かくしてお茶の色と香りと味という、いわゆる三絶が一日で揃いました。あなたのお気持ちが無駄になっていないことをお知らせします。こちらで軽々しい飲み方をしたのではないことを、どうぞお分かりください。

一八八二（施三二―一二）

次韻晁无咎學士相迎
晁无咎学士が相迎うるに次韻す

1	少年獨識晁新城	少年　独り識る　晁新城
2	閉門却掃卷旆旌	門を閉ざして却掃して旆旌を巻く
3	胸中自有談天口	胸中自ら談天の口有り
4	坐却秦軍發墨守	坐ながら秦の軍を却け　墨が守を発く
5	有子不爲謀置錐	子有り　為に錐を置つるを謀らず
6	虹霓呑吐忘寒飢	虹霓を呑吐して寒飢を忘る
7	端如太史牛馬走	端に太史が牛馬走の如く
8	嚴徐不敢連尻脽	厳・徐　敢えて尻脽を連ねず
9	裴回未用疑相待	裴回して未だ用いられず　相待つかと疑う
10	枉尺知君有家戒	枉尺　知んぬ　君が家の戒有ることを
11	避人聊復去瀛洲	人を避けて　聊か復た瀛洲を去り
12	伴我眞能老淮海	我に伴って真に能く淮海に老ゆ
13	夢中仇池千仞巖	夢中の仇池　千仞の巌

（担当　蔡毅）

14 便欲攬我青霞幰　　便ち我が青霞の幰を攬らんと欲す
15 且須還家與婦計　　且く須く家に還って婦と計るべし
16 我本歸路連西南　　我れ本と帰路　西南に連なる
17 老來飲酒無人佐　　老来　酒を飲んで人の佐くる無く
18 獨看紅藥傾白墮　　独り紅薬を看て白堕を傾く
19 每到平山憶醉翁　　平山に到る毎に酔翁を憶う
20 懸知他日君思我　　懸かに知る　他日　君が我を思わんことを
21 路旁小兒笑相逢　　路旁の小児　笑って相逢い
22 齊歌萬事轉頭空　　斉しく歌う「万事転頭に空し」と
23 賴有風流賢別駕　　頼いに風流の賢別駕有り
24 猶堪十里卷春風　　猶お十里　春風に巻くに堪えたり

○元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○晁无咎学士　晁補之のこと。无咎はその字。蘇軾「新城の陳氏の園。晁補之の韻に次ぐ」詩（『蘇東坡詩集』第三冊三六二頁）の詩題の注を参照。この時、晁无咎は、揚州通判であった（『続資治通鑑長編』巻四五三、元祐五年十二月戊申の記事）。晁補之の原詩の詩題に「東坡先生　移りて広陵に守たり、詩を以て往きて迎う。先生　淮南の旱を以て、書中に虎頭祈雨の法を教う。始めて諸祠に走りて、即ち甘沢を得たり。因りて賀を為す」（『鶏肋集』巻一三）とあり、本詩の題に「相迎」と言うのと符合する。

1○少年一句　晁新城は、晁无咎の父・晁端友のこと。字は君成。新城県（浙江省）の令（県長）であった。蘇軾「新城の道中　二首」その二（『蘇東坡詩集』第二冊五〇五頁）の注を参照。その生卒年は未詳であるが、黄庭堅「晁君

成の墓誌銘」（『黄庭堅全集』巻三一）に、四十七歳で没したとあり、また、熙寧乙卯（一〇七五）に京師で病臥したとある。蘇軾「晁君成詩集の引」（『蘇軾文集』巻一〇）に「乃者　杭に官たり。杭の新城令晁君君成、諱は端友なる者は、君子人なり。吾れ之と遊ぶこと三年、其の君子為るを知りて、而も其の文と詩とを能くするを知らず、而も君も亦た未だ嘗て一語も此に及ぶ者有らず」とあり、蘇軾が通判として杭州に在った熙寧四年（一〇七一）から七年（一〇七四）の間に交流があったことがわかる。時に蘇軾三十六～四十歳、晁補之は二十歳前後、その父端友は、蘇軾より十歳余り年長であったと推測される。2〇却掃　退いて門前を掃ききよめておく。門をとざして客に会わないことをいう。蘇軾「周長官・李秀才と径山に遊ぶ……二首」その二（『蘇東坡詩集』第三冊六〇頁）の注を参照。〇巻旆旌　はたを巻く、ひいては退陣すること。1句の注に引く蘇軾の詩に「散材　見んことを畏る　林を捜る斧、疲馬　聞かんことを思う　旆を巻く鉦」とある、その注を参照。3〇談天口　天を談ずる口とは、談論の気宇のきわめて壮大なるをいう。『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八三七「洞庭の春色　并びに引」の注を参照。4〇坐却秦軍　知謀によって強敵を退けること。戦国時代に、斉の魯仲連がその知謀によって、趙を包囲した秦軍を退却させた故事を踏まえる。『蘇軾詩注解（十四）』に収める作品番号一八〇六の詩の注を参照。〇発墨守　堅い守りを撃ち破ること。墨守は、春秋時代、墨翟が宋の城を堅く守る策を立てた故事にもとづく。3句で、晁端友が、気宇壮大な談論をする才を秘めていることを述べたのをうけて、それがどういったものであるかを二つの故事を引き合いにして示している。5〇有子一句　置錐は、錐をたてるのがやっとというくらいにわずかな土地のこと。一句は、『荘子』盗跖篇に「堯・舜　天下を有つも、子孫に錐を置つるの地無し」とあるのを踏まえ、晁端友が、子孫のために自らの地位や財をわずかも残せなかった人であることを述べている。6〇虹霓一句　虹霓は、虹。蘇軾「八月十五日に潮を看る　五首」その五（『蘇東坡詩集』第二冊四九頁）の注を参照。呑吐は、呼吸する。一句は、3 4句で述べるように気宇壮大な談論の才を発揮した晁端友が、自らの暮らし向きには頓着しなかったことをいう。7〇太史牛馬走　太史公の僕。司馬遷の謙称。太史は、太史公（司馬遷の父・談を指す）。牛馬走は、走り使い。司馬遷「任少卿に報ずる書」（『文選』巻四一）に「太史公の牛馬走・司馬遷、再拝して言す」とある。一句では、晁補之を司馬遷に擬えて

いる。8〇厳徐一句　厳・徐は、厳安と徐楽。連尻脽は、比肩すること。漢の武帝が、東方朔に対して、厳安・徐楽を含め、朝廷にひしめく賢才多数の名を挙げ、朔自身と比べてどう思うか尋ねたところ、東方朔は、「股と脚を結び、尻と脽を連ね」云々と、比肩するものの喩えを幾つか示してみせ、自分はその数人分の才を兼ねていると答えた（『漢書』東方朔伝）。梁・任昉「勅して七夕の詩を示さるるに奉答する啓」（『文選』巻三九）に「晩に天飛に属し、厳・徐に比びて詔を待つ」とある。『四河入海』巻一九の三に引く一韓智翊の聞書に「云（フココロ）ハ、厳・徐ガ輩ハ、司馬遷ナンドト肩ヲ比ベテ踵ヲ接スルコトハ、エセマイゾト云（フ）心ゾ」とある。9〇裴回　徘徊。歩きまわること。徘徊に作るテキストもある。『後漢書』馮衍伝下に「大路に遵って裴回し、孔徳を履みて窈冥たり」（孔徳は大きい徳）とある。〇相待　機会を待ち受けること。10〇枉尺　大きな道（成果）を得られるなら、少しばかり節を屈することなど構わないという考え方。『孟子』滕文公下篇に「尺を枉げて尋を直くす」という話を引き合いに陳代が薦める処世態度を、孟子が非難する話が見える。蘇軾「兪節推を送る」詩（『合注』巻一九）に「我が生　命有らず、其れ肯て尺尋を枉げんや」とある。一句では、9句で、晁補之がなかなか登用されず足踏みしているかに見えると述べたのを承けて、君（晁補之）は、成果を達せられるなら、小節を屈しても構わないというような生き方を、晁家、分けても父・端友から厳しく戒められているのでしょうと述べている。11〇避人　俗な世間から離れる。蘇軾「普照に自り二庵に遊ぶ」詩（『蘇東坡詩集』第二冊四九八頁）に「詩を作って寄せ謝す　採薇の翁に、本と人を避けず　那ぞ世を避けんや」とある。〇瀛洲　東海中の三神山の一つ。仙界。ひいて、朝廷のこと。唐の初め、房玄齢・虞世南など十八名が、その肖像画を宮廷に飾られ、文学館学士として太宗に厚く遇された。そのことが、人々から「登瀛洲」と喩えられた（『旧唐書』褚亮伝）。ここでは、それを借りて「去瀛洲」と言い、晁補之が、校書郎から揚州通判に転出した（『宋史』の伝）ことを指す。かつ、それが晁補之自らの願いによるものであることも含意するか。一韓智翊の聞書に「言（フココロ）ハ、無（无）咎　今朝廷ノ官職ヲイヤト云（ヒ）テ捨（テ）去（ッ）テ朝廷ヲ出（ヅル）ヲ云（フ）ゾ。朝廷ヲ去（ッテ）我ニ随（ッ）テ揚州辺マデ来ルゾ」とある。12〇淮海　揚州一帯の地。13〇夢中一句　仇池は、秦州（甘粛省）付近にある山の名。蘇軾「双石」詩（詩人選集『蘇軾』下・五一頁）の序に「潁州に在りし

日、人の一つの官府に住せんことを請い、榜に「仇池」と曰えるを夢みしが、覚めて杜子美の詩を誦したりき」とある。その注を参照。一韓智翃の聞書に「以下ノ四句、言（フココロ）ハ、坡曽テ夢ニ仇池ノ仙郷ニ遊（ン）デ、遂ニ真住ノ意有（ル）ゾ。サル程ニ、无咎ドノモ我ガ青霞幰ヲ取リアツレテ、行カントヲセラルレドモ、其（レ）ハソコツナコトゾ。先（ヅ）帰（ツ）テ妻ト談合アレト云（フ）ゾ」とある。14〇青霞幰　霞でできた垂れ衣。梁・江淹「恨みの賦」（『文選』巻一六）に「青霞の奇意を鬱し、修夜の暘けざるに入る」とあり、李善の注に「青霞の奇意は、志言　高きなり」とある。13句で夢に仇池を見ると詠じたのを承けて、蘇軾は、仙境をめざす志の高さを示す衣をまとう者に自らを擬している。15〇且須一句　楚の荘王が優孟を相に取り立てようとすると、優孟が「帰りて婦と之を計らんことを請う」と言った（『史記』滑稽伝）。一句は、晁補之に対して、蘇軾に随伴して隠逸をめざす旅をするかどうかは、奥さんと相談してみなさい、と勧めている。16〇我本一句　西南は、蘇軾の故郷・眉州眉山県（四川省）を含む、宋の西南一帯のこと。蘇軾が、西南を帰路と詠じた例として、蘇軾「九日　袁公済に詩有り、其の韻に次す」（『合注』巻三二）に「笑って西南を指す　是れ帰る路、飛ぶに倦む弱羽は久しく還らんことを知る」がある。17〇老来一句　佐は、側で勧める。『国語』晉語に「之を召して食を佐めしむ」とあり、韋昭注に「佐は、猶お勧むるのごとし」とある。一句で、蘇軾が、酒を勧めてくれる人がいないと歎じる、その人とは、宴席で貴人の側近くに侍って酒や食事を勧める妓女を指すであろう。後の23句24句で、春風が巻き上げる珠簾の向こうにいるはずの妓女の姿が暗示されるのと係けて解される。18〇紅薬　紅芍薬。斉・謝朓「中書省に直す」詩（『文選』巻三〇）に「紅薬は階に当たりて翻り、蒼苔は砌に依りて上る」とある。芍薬の花は、初夏に咲いて、赤、白、紫など数種のものがあり（『国訳本草綱目』草部・芍薬）、とりわけ、揚州の芍薬は名高く、宋・王観の『揚州芍薬譜』に「洛陽の牡丹、維揚の芍薬」と並称される。〇白堕　酒造りの名人の名。『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八四三の詩の注を参照。ここでは、名人の醸した酒を言う。19 20〇毎到・懸知二句　平山堂は、堂の名。慶暦八年（一〇四八）二月、欧陽修が揚州の大明寺の敷地内に造らせた（『輿地紀勝』巻三七）。酔翁は、欧陽修のこと。知滁州の任にあった時、「酔翁亭の記」を著し、酔翁と号した。『蘇軾詩注解（十七）』に収める作品番号一八二八の詩の注を参照。懸知は、遠い過去・遠い

将来のことをありありと目に見えるように思い浮かべること。二句は、平山堂に遊ぶ毎に、堂を修築した、今は亡き欧陽修の姿をありありと思い起こすと詠じ、晁補之に向かって、欧陽修が没してから既に二十年、自分がこうして欧陽公を思い起こすように、遠い将来、君が揚州に遊んだ時には、ありありと私を思い出してくれるに違いない、と言っている。2122〇路旁・斉歌二句　笑相逢は、じゃれて集まること。晉の永嘉中、襄陽に鎮した山簡が、荊州の豪族たちの佳麗な園池に遊んでは、酒を飲んで酩酊する日々を過ごしていた。襄陽の童児は、これをからかって歌いはやしたという（『晉書』山簡伝）。李白「襄陽の歌」に「襄陽の小児　斉しく手を拍ち、街を攔って争い唱う　白銅鞮」（『李太白全集』巻七）とある。転頭は、瞬く間。蘇軾「西江月（三たび平山堂の下に過り、……）」詞（『東坡楽府箋』巻一）に「言う休かれ　万事　頭を転じて空しと、未だ頭を転ぜざるに時皆な夢なり」とあり、これは、白居易「自詠」詩（『白居易集箋校』巻三四）に「百年　手に随いて過ぎ、万事　頭を転じて空し」とあるのを踏まえる。二句は、かつて蘇軾が唐の白居易の詩句を踏まえて詠じた詞の一節が、揚州の童児の間で、今に至るまで歌い継がれているさまを詠じている。23〇賢別駕　別駕は、知事の副官。通判である晁補之を指す。一韓智翃の聞書に「言（フココロハ、頼（ヒ）ニ揚州ニハ風流ナル別駕ノ无咎ドノノ御ワタリ有ル程ニ、十里バカリノ間、美人ドモノヲル処ノ珠簾ヲ捲（キ）テ、遊（ブ）ベキゾ」とある。24〇猶堪一句　一句は、杜牧「贈別　二首」その一（『樊川文集』巻四）に「春風十里　揚州の路、珠簾を巻き上ぐるも総て如かず」とあるのを踏まえる。蘇軾「戯れに贈る」詩（『蘇東坡詩集』第二冊四〇三頁）の注を参照。なお、揚州、平山堂、春風のつながりは、蘇軾から欧陽修への追慕を投影していよう。2122句の注に引く蘇軾の詞に「文章太守を弔わんと欲して、仍りて楊柳春風を歌う」とあり、その文章太守とは、欧陽修が「朝中措（平山の欄檻　晴空に倚り、……）」詞（『欧陽文忠公集』近体楽府巻一）で自らを指した話であり、また、同じ詞に「手づから堂前の楊柳を種う、別来　幾たびか春風を度る」とあるのを踏まえている。

若い頃から私だけは晁新城（端友）どのの人柄をよく存じ上げておりました、旗を収め戦を止めた軍隊さながら、門を閉ざして世間との交わりをきっぱりと絶っておられました。しかし、心の中には気宇広大な話を語

る器量をそなえ、まさに、談笑のうちに手強い秦の軍勢を退けることもできれば、墨子の手堅い防禦策さえ打ち破ることができる、というものでした。

そのご子息には、錐を立てるのがせいぜいの土地さえも残さなかったけれど、大空にかかる虹の気を呑んだり吐いたりするような盛んな才気を示して、飢えも寒さも意に介さぬありさまでした。そして、子息であるあなたは、まさに、かの太史公（司馬談）の僕にふさわしく、厳安や徐楽などはとても足元にも及ばなかったのです。

都に在って登用されずに無聊の日々を送っていたのは、良き出会いを待ってのこととお見受けします、「大きな成功が得られるなら、少しばかり節を曲げるのなど構わない」などという考え方は、あなたのお家ではきつく戒められているのでしょう。自ら願って世間から離れて宮廷を後にし、私とともに揚州の地で老いてゆこうとしておられます。

夢に見るのは仇池の千仞の巌、そんな私の青霞の垂れ衣を手に取って、隠逸をめざす供をしようとご希望です。まずはご自宅へ帰って奥様に相談なさい、私にとってはもともと西南のかたは故郷への帰り路なのですから。

年をとったこの頃は、酒を飲むにもお相伴してもらうこともなく、独り赤い芍薬の花を伴として白堕の名酒を傾けるばかりです。平山堂を訪れるたび、酔翁（欧陽修）どののことを懐かしく思い出す私ですが、いずれはあなたが私のことをこのように思い出してくれるのでしょう。

道端で子どもたちがじゃれながら集まって、「すべてはあっという間に消えてしまう」と歌っています。ありがたいことに風流のわかる頼もしい副知事どのがいらしたので、春風が揚州の街十里の珠簾を吹き揚げて揚州の綺麗どころを堪能させてくれるでしょう。

（担当　原田直枝）